

第2部後半・参加者との意見交換要旨

登壇者からの時間軸と空間軸で考え、「集う、憩う、誇れる」というキーワードをベースに提案された3つの案と、鎌倉市由比ガ浜地区の土地開発に対して、会場からの発言がありました。

お一人目に挙手された方からは「公園」の案が興味深いと発言がありました。しかし鎌倉市には既に健康に配慮した環境が整っていると指摘し、健康の切り口だけでは壁にぶつかる可能性があるかと懸念も示しました。また、鎌倉の価値として、外部の人と地元の人が交流できる関係構築が重要だと述べ、海外の事例に学び交流を促進する可能性を提案しました。

お二人目の方からは、このシンポジウムそのものに対する強い反対意見が表明されました。「鎌倉においては、今何もしないことをそのまま残すことの方が最大の価値、鎌倉市民の義務」との主張です。彼は当地の住民協定の作成に関わった経験から、ホテルや共同住宅の建設案に失望を示し、津波浸水地域であることを理由に空き地を残して避難場所として活用すべきだと訴えました。また、市長提案の重要性と、住民協定を無視した市の対応に対する不満を表明しました。

鎌倉に3年前から住んでいるという3人目の方からは、行政や業者が鎌倉市や鎌倉という場所を無視していると感じていると述べました。彼は住民が様々なアイデアを出していることに感銘を受け、鎌倉の素晴らしさを守るためには、鎌倉を大切に人々が住み続けることが重要だと主張しました。

4人目の鎌倉生まれで100年以上代々鎌倉在住の参加者は、鎌倉を「いじらないでほしい」と強く訴え、開発よりも保存を優先すべきだと主張しました。

また、由比ガ浜西自治会に隣接する町に住む発言者からは、鎌倉のオーバーツーリズム問題に触れ、また、市の主催の様々なワークショップに参加した経験から、折角の議論が行かされていないことを指摘しました。またその経験から、その土地に相応しい、各地域の特性を活かした開発の必要性を指摘しました。

そして、由比ガ浜4丁目に住む参加者から、この地の歴史、特に海濱ホテルについて説明し、昭和20年頃にあったホテルが火事で焼失した経緯を語りました。そこからの意味を考え、新たな開発計画においても鎌倉らしさを考慮すべきだと主張しました。

最後の発言者からは、国立市における積水ハウスの事例から、住民意見を無視した開発の結果、計画を断念せざるを得なかったことを示し、開発業者は過去の失敗から学び、市民の提案を取り入れた新たな歴史的資産を作るべきだと提案しました。また、鎌倉市、業者、住民の三者による協議の場を設けることの重要性を強調しました。

会議の締めくくりとして、主催者は市民の意見を市や事業者に届けていくこと、三者協議を求めていくことを表明し、またアンケートなどに更なる意見を求め、会は終了しました。